

【#3】走馬燈のオハナシ

Text by 小助川駒介
Komasuke KOSUKEGAWA

本日は私の講演会『前世について考える』
にご来場いただき誠にありがとうございます。

「前世」と言う言葉に対する反応はさまざまでしょう。
私は長年、所属する大学機関において、
この「前世」研究を続けてきたわけですが、
周囲からの評判は惨憺たるものでした。
実証できないものはサイエンスに非ず、
という現在のアカデミズムのスタンスからいえば
これは当然の結果と言えるでしょう。

しかしそこまで「実証」は万能なのでしょうか。
生命のはじまりは「藻類」であるとか、
われわれが暮らすこの地球は「球体」であるとか、
定説とされていること自体に異を唱えるつもりはありません。
しかし検証されているとはいえ、それらすべてはいまだに
まだ「仮説」に過ぎないのではないか、
というのが現在の私の立場です。

「前世」も、いつか実証されるというものではなく、
あくまでも仮説や可能性を検討するに過ぎない、
というふうに思っています。

また私は、「前世」については、
信じるか、信じないか、と言った問題でもなく、
どちらかといえばそれは、知っているか、知らないか、
という知識の問題だ、と考えていることを付け加えておきます。

後述しますが、この「知識」については、
本を読めばわかる、といった種類のものではないのです。

もちろん「前世」について書かれた本は、
私のまったく売れない本も含めて数多あるわけですが、
それらはただ前世というものについての
概要を理解するに過ぎません。
体験をともない、ある意味肉体化した知識とならなければ
知っている、とまではいえないのだと思います。

多くの場合前世の記憶は、話せるようになった幼児期に
一度生きた人生の記憶、として語られることが多いものです。

一方、成人してから、なんらかの大きな事故により
生死の境界を彷徨って生還した場合にも、
前世の記憶が蘇るという事例も多数報告されています。

かくいう私もその一人であることも
この場を借りてお伝えしておきましょう。

もう十年前になりますが、
ある朝、目が覚めたら人工血管を入れられていました。
私はほとんどおぼえていないのですが、
庭仕事をしているうちに胸の奥に激痛が走り、
意識を失い、ICUに運ばれて緊急の手術が施されたのです。
医師の判断が数分遅れていたら、おそらく私は
この場で「前世」についての講演などできなかったでしょう。

意識が戻るまでの間、私は生きるか死ぬかの境にいたようです。
人は死ぬ直前にそれまでの人生がフラッシュバックされる、
という話はみなさんも聞かれたことがあるかと思います。
しかしそのとき蘇ったのは、私の人生の記憶ではなく、
何度も繰り返される「前世」の記憶だったのです。

それらすべてをお伝えすることはできませんが、
ごく一部を紹介しましょう。

あるとき私は、古代ギリシャにおける政治家でした。

私は正義感が強かったらしく、
腐敗のかぎりをつくす当時の支配者に対して、
公然と批判を行なった廉で死罪となり
「ディアスフェンドネーゼ」と呼ばれる
残虐な方法によって殺されることになりました。

この一部始終を、見ていた一人の少女の目を
私は忘れることができません。
その少女が、実は、現世での私の母であることも、
昏睡状態と思われていた意識、あるいは無意識の中で、
私は直感的に理解できてしまったのです。

またあるときは、一匹の犬だったこともあります。
現在のオーストラリアにあるウルルという巨大な一枚岩、
これはいま一般的にはエアーズロックと呼ばれていますが、
先住民にとっては神聖な場所です。
その周辺の村落に住むアボリジニーの少年に
大変にかわいがられていたのですね。
ところが、私はある日毒蛇に噛まれて死んでしまいます。
このときの少年は、
現世で私のことをかわいがってくれた祖父でした。

もうひとつの例をお話しします。
おそらくは中国の明の時代。
私は何度も科挙の試験に失敗した貧しい学者でした。
朝も夜もなく「四書五経」を学び続け、
お前なんか何度やっても無駄だ、と周りから蔑まれ、
決して認められることはなかったのです。

結局のところ、私は当時猛威を振るっていた
伝染病にかかって死んでしまうのですが、
ただ一人、最後まで私を決して見捨てなかったのが、
当時の、そしてまた現世でも
私の学問を応援してくれた妻でした。

その前世の、最後の夜を私は覚えています。
外に出られない私のために、妻は「馬騎灯」と言われる
影絵の灯篭を作ってくれました。
回り続ける馬と人の影絵、私を心配そうにのぞき込む
妻のまなざしが、その人生での最後の記憶です。

これらは私が「知る」ことになった前世のいくつかです。
もちろんこういった事象を、脳内に起こる一時的な幻覚、
と片付けることは簡単です。

そして実際にそうなのかもしれません。

科挙の試験に苦しんでいた前世、
そして、世の中から認められない研究を続けてきた現世、
その二つの時代を支えてくれた妻も、
去年亡くなってしまいました。

いま、寂しいのはもちろんですが、
同時に私は明るい希望も抱いています。
なぜなら私は、大事な人にはまたいつか会えることを
「知って」いるからなのです。

今日この講演に来ていただいたみなさん、
いま、みなさんの「大事な人」を思い浮かべてみてください。
だれもがいつかは「死」によって別れる日が来るでしょう。
しかしその死は、決して終わりではありません。
いつかまたどこかの時代で会うための
「始まり」でもあるのです。

さよならをくりかへしゐる走馬燈　　石原八束